

一、次の①から⑤の傍線部の漢字をひらがなに、⑥から⑩の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- | | | |
|--------------------|---------------------|---------------|
| ① 温泉地で旅館を営む。 | ② 樹液を集めてゴムを作る。 | ③ 残飯を飼料に転用する。 |
| ④ 著名な作家の講演を聞く。 | ⑤ お年玉を銀行に預金する。 | |
| ⑥ 国語の授業で小説をグンドクした。 | ⑦ ジュウオウ無人のはたらきであった。 | |
| ⑧ リョウシュウシヨに印鑑を押す。 | ⑨ 陸橋のソクドウを工事している。 | |
| ⑩ アクセン身に付かず。 | | |

二、次の①から⑤の熟語の前に漢字一字を付けて反対の意味をもつ三字の熟語にしたい。前に付けるのに適当な漢字一字をそれぞれ答えなさい。ただし、同じ漢字を答えてもよい。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| ① 解決 | ② 反応 | ③ 関心 | ④ 利益 | ⑤ 日常 |
|------|------|------|------|------|

三、次の会話文の中の①から⑤の傍線部について、表現として適当なものには○を、適当でないものには×を、それぞれ答えなさい。

生徒 おはようございます。先生。

先生 おはようございます。

生徒 先生、^①聞きたいことがあるのですが、お時間よろしいでしょうか。

先生 はい。いいですよ。

生徒 ありがとうございます。実は、来月の二十日に転居することになりましたので、当日、^②欠席させていただきますので

す。

先生 二十日ですか。

生徒 はい。残念ながら卒業式に参列することができなくなっていました。そこで、卒業証書など、必要なものを翌日学校に^③受け取りにいらつしやりたいのですが、^④ご都合はいかがでしょうか。

先生 わかりました。二十一日に^⑤取りにうかがってください。午前中であればいつでも構いません。

生徒 ありがとうございます。では、失礼いたします。

四、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(二)までのあらすじ)

六年生のアキラ、マサアキ、ケンジ、五年生のタクヤは同じ小学校に通い、常に一緒に行動をしていた。力の強いアキラと頭のいいマサアキに対し、気持ちの強くないケンジは、その中で自分の居場所をなんとか確保していた。そんなケンジをタクヤは慕^{した}っていた。

彼らが住む地区の川では年に一回大人たちによる川ざらい(掃除^{そうじ})があり、その際に浮^うき上がってくる魚をつかまえるのが子どもたちの楽しみでもあった。五年生がバケツを持つというきまりがあつたが、今年の五年生はタクヤしかおらず、そのことをアキラもケンジも気にかけていた。

次の日、空は朝から^①意地悪なくらい晴れ渡り、雲一つ見当たらなかった。

子どもたちは、約束の時間よりうんと早くから川に集まり、土手の上を落ち着かない様子で、行ったり来たりを繰り返していた。^②ケンジもやはり、時間より早くバケツを持って家を出た。しかし、真つすぐ川には向かわず、タクヤの家に向かった。「一緒に^③誘^{さそ}う勇氣などなかったが、どうしても気がかりだった。ケンジは、石垣^{かき}の道を進み、隣^{となり}の家の垣根^{かき}の透き間から、タクヤの家の様子をうかがった。タクヤの家の庭では、タクヤの父が熱心^{かま}に鎌^{かま}を研いでいた。

シャリ、シャリ、シャリ、

シャリ、シャリ、シャリ、

規則正しい砥石^{とじ}の音が、ケンジの耳に届いた。

「タク！ そろそろ行くぞ」

と、父親の大きな声がした。ケンジは身を低くして庭の様子をうかがった。

「おい、タクはいないのか」

「タクヤなら、倉庫に閉じこまったきりだよ」

返ってきたのは、母親の声だった。

「しょうがねえなあ、先に行くからな」

タクヤの父は、地下足袋をていねいに履き直すと、鎌を持って立ち上がった。

（倉庫に閉じこもったきり……）

ケンジは、タクヤの不可解な行動が不思議だった。

（いったい、なにをしているのだろうか？）

（このまま、川ざらいが終わるまで、倉庫に隠れているつもりなのだろうか？）

一分が経ち、二分が経ち、三分が経っても、タクヤの現れる気配はなかった。

（行く）

ケンジは、垣根の間からひよいと飛び出すと、石垣の道を走った。バケツが、ガチャンガチャンとうるさく鳴った。もう川には、みんなが集まっている時間だった。洗い場のある橋のまわりには、何十人も大人があふれ返り、ケンジはその間を縫うようにして、対岸に向かった。草の生えた対岸の土手には、もう、ほとんどの子どもが集まっていた。彼らの手には、網やザルやバケツなど、思い思いの道具がしっかりと握られている。

「オッス、ケンジ」

声をかけたのは、アキラだった。

「おはよう、アキラ」

「おう、タクヤは？」

アキラは、真つ先にタクヤのことを聞いた。ケンジは、^④黙ったまま首を横に振った。

「やっぱり、来ねえかなあ」

「アキラも、そう思う？」

^⑤「……」

ケンジは、タクヤは来ないだろうと思った。倉庫の中に閉じこもって、一人で泣いているのだろうと思った。

「よう、いい網だろう」

マサアキが、自慢げに網を振りながら近づいてきた。アキラは、その網を取り上げると、ヒュンヒュンと軽く振ってこういつた。

「たいしたことないな」

「アキラ、お前の網は？」

「俺は、手づかみだ」

「ウナギが出ても知らないぞ。後で泣いても知らないぞ」

「へん」

アキラは、マサアキの忠告を鼻で笑った。

「それより、問題はバケツ持ちだ」

「タクヤが来ないのか？」

「ああ」

三人は土手の上に立ち、タクヤが来るであろう対岸の柿の木の脇をじっと眺めた。三年生までのチビ共は、三人から少し離れたところにかたまって、わいわい声を上げている。

「どうする？ アキラ」

^⑥「……」

「タクヤの奴、きつと来ないぜ」

⑤「……………」

マサアキが話しかけても、アキラはじつと黙り込んでいた。やがて、洗い場のあたりに固まっていた大人たちが、そろそろと下流に向かって歩き出した。

「始まるぞ、始まるぞ」

マサアキや三年生たちが声を上げて、アキラはやはり黙っていた。

「アキラ、始まるぞ」

⑤「……………」

「行くぞ、行くぞ」

「うるさい！」

黙っていたアキラが口を開いた。マサアキは驚き、目玉を真ん丸にしてじつとアキラの顔を見た。（いったい、なにを怒っているのだ？）そんな顔だった。ケンジも、そんなアキラの横顔を、じつと見つめた。そして、様子をうかがうような声で、こういった。

「仕方ないよね。一人でバケツ持ちは、やっぱりむりだね……」

しかし、アキラは、さらに声を荒げて怒鳴った。

「そういう問題じゃない。なんで来んのだ！」

土手の上の子どもたちは、皆、しんと静まり返った。同じ六年生のマサアキやケンジでさえ、声をかけられぬ雰囲気だった。

「行くぞ！」

アキラの一声で、張り詰めた空気のまま、子どもたちの行進は始まった。アキラの横にマサアキが、その後ろにケンジがと、

いつもの登下校と変わらぬ行進だった。しかし、タクヤがいないことで、ケンジの横には、ぽっかりと穴が空いているようでもあった。

やがて、マサアキがアキラに話しかけた。

「アキラ、どうする？」

「どうするって？」

「タクヤだよ。このままじゃ、許せんだろう。やっぱり、はりつけか？」

マサアキのいうへはりつけ」というのは、お寺の石垣に大の字に立たせ、みんなで順番にゴムボールをぶつけていくという残酷な罰ゲームだ。

「ずっと口を利いてやらないって手もあるけどな」

マサアキは、楽しんでいるかのように、次つぎタクヤへの罰を提案した。ケンジはそれを聞きながら、マサアキのことが、心の底から腹立たしく思えた。もし、自分がタクヤの立場だったらと思うと、タクヤが哀れで仕方なかった。

「おい、ケンジ」

アキラの声だった。

「えっ」

「お前は、どう思う、お前は、タクヤのことをどうしたらいいと思う？」

いきなり質問されて、ケンジは困ってしまった。いくらタクヤに同情しているとはいえ、マサアキやアキラに逆らう勇気など、どこにもなかった。

「……………」

答えられずにいるケンジに、マサアキがいった。

「やっぱり、はりつけだよな」

「……」

しかし、ケンジは答えることができなかった。アキラがいった。

⑥「卑怯だ、ケンジは」

意外にも冷たいアキラの一言がケンジの胸を突き刺した。(卑怯だ)その一言は、ケンジの頭の中をぐるぐると回り、いくら振り払おうとしても離れなかった。

大人たちは、五百メートルも下流に歩いたところで、土手から川へ下った。子どもたちは、大人が下りていったその場所に立ち、川の様子をうかがうことにした。三メートルほどの川幅に一塊ひとかたまりになった四十人もの大人が歩いていく。鎌で水草を刈る者、両岸の草を刈る者、スコップで川底の泥どろを掘り出す者、川に浮いた水草や草を土手に放り上げる者。それぞれの大人が、それぞれの仕事をしながら、ゆつくりと上流に歩いていく。子どもたちは、じっとその姿を目で追った。あと十年もすれば、彼らがこの仕事を担うのだが、そんなことに気づいている子どもは一人もない。子どもたちは、シジミ川の濁りなく澄んだ流れが大人によって踏み荒らされ、どろどろに濁っていくのを見て大声を上げた。そして、上流へ逃げ惑う魚の影を見つけては、歓声を上げた。

「行こうぜ、行こうぜ」

「よーし、つかむぞーっ」

「バケツはあるか？」

「あるある」

「自分で持て、自分で」

みんなは、いつせいに土手を駆け降りようとした。

そのときだった。

「ああつ、タクヤだ！」

アキラの大きな声がして、みんなの足はびたりと止まった。子どもたちは、アキラの指さすほうを注目した。大人たちのいるところより、はるか上流からタクヤがこっちに向かって走ってくるのが見えた。草の生えた土手の上を、よたよたとよろけながら、それでも必死に駆けてくる。

「なんだ、あれは？」

「なにか、背負っている」

「亀だ。亀みたいだ」

汗あせだくで走るタクヤの背中には、大きなタライが背負われていた。大きなタライは小さなタクヤの体からはみ出し、一步一步走るたびに大きく揺れていた。タクヤはみんなの注目を浴びながら、駆け寄ってきたアキラに、背負ってきたタライを差し出した。

「これ、これに魚を入れよう」

息を切らしながら、タクヤはそういった。

「こいつは、すごいや」

アキラは、近寄ってきたみんなに、タライを見せながらそういった。

タライはずいぶんと古く、底は錆び付いて小さな穴がいくつも空いていた。これでは水を入れれば漏もってしまうし、水に浮かべれば沈しずんでしまう。しかし、アキラが驚いたのは、タライの周りに取り付けられた、自転車のタイヤチューブと蓋ふたの代わりにする金網だった。空気の詰まった自転車のタイヤチューブをつつきながら、マサアキがいった。

「これ、水に浮かぶのか？」

「うん。これならバケツよりうんと大きいし、一人で引っ張れるでしょ」

タクヤは、^⑦満身の笑み^えでそう答えた。

「この網はどうした？」

「古い網戸の網だよ。この隙間^{すき}から、魚が入れられる」

「すごいや。本当にすごいや」

アキラは、もう一度そういうと、タライを大きく上に掲^{かか}げ、土手を下った。

「いいか。浮かべるぞーっ」

アキラは川に入ると、タライを水の上にトンと置いた。そして、両手でしっかりつかむと、タライを水の中にガボンと押^おし込んだ。タライは、いったん濁った水の中に沈んだが、すぐにプカリと浮かび上がった。

「うおおーっ」

子どもたちの歓声が上がった。タクヤは土手の上から、自分の作ったタライの生けすが浮かぶのをじっと見ていた。そして、水面に黒くて丸いタイヤが浮かぶと、なんともいえぬ満足げな表情をした。

アキラは、タライに取り付けられたロープをつかみ、タクヤにこういった。

「お前が持つか」

「うん。僕が一人で持つ」

胸を張ったタクヤの声は、誇^{ほこ}らしげでもあった。

昨日の夕方、お寺の前でアキラとケンジに出会ってから、タクヤは隣村の自転車屋に向かった。そして、そこで中古のタイヤチューブを分けてもらったのだ。家にあった古いタライの底に、五寸クギで均等に穴を空け、チューブを縛^{しば}るための穴も苦労して空けた。それから、物置にあった破れた網戸の網を引きはがすと、蓋にしてヒモでしっかりと縛り付けた。慣れない作業とタ

ライが丸く扱^{あつか}いにくいいため、作業は困難^{きんなん}を極めた。夜遅^{おそ}くまでかかっても完成せず、ついさつき完成したばかりだった。

タクヤが川に入り、アキラからロープを受け取ると、ついに子どもたちの魚取りは始まった。先頭に行くのは、やはりアキラとマサアキだった。網を持ったマサアキは川の真ん中を歩いて、流れてくる小魚を手当たり次第^{しだい}すくっては、タライに押し込んだ。アキラは手づかみなので、右岸に行ったり左岸に行ったりと、魚の潜^{ひそ}んでいそうな草や藻^もの中に手を突っ込んで歩き回った。タクヤは川の真ん中を、タライをひいて歩いた。プカプカと流れてくる小魚をすくったり、みんなが手渡す魚をタライに入れたり、それは大忙^{いそが}しだった。みんな、実に生き生きと嬉^{うれ}しそうに川ざらいを楽しんだ。

しかし、ケンジは別だった。大騒^{さわ}ぎをして楽しむ子どもたちの中で、ケンジだけが複雑な顔をしていた。

誇らしげにタライを引くタクヤを、ケンジは黙って見つめていた。

川に入って五十メートルも歩いたころ、子どもたちの興奮^{ふん}は、どんどんと高まった。最初落ち込んでいたケンジでさえ、次々に現れる魚の影に大声を出し始めた。

「いてーっ。足に当たった。魚が足に当たったよ」

「こっちもだ。でかい、でかいぞ。ケンジ、そっちだ」

「えっ、どこどこ？」

「今度は、絶対につかまえてやるからな」

先頭の六年生は横一列になって、じりじりと足を進めた。網を持ったマサアキが真ん中、手づかみのアキラは右岸に、ケンジは左岸にという具合だ。

「マサアキ。流れてくる小物は、全部お前に任せたからな」

「任せとけ。アキラは？」

「俺は、草の下に隠れた大物を狙う」

アキラは、そういつて草の下に両手を突っ込んだ。前に行く大人たちが刈り取った草や藻は、土手の上に投げ上げられていた。しかし、それでもいくらかの草が川の兩岸にたまり、魚の隠れ場所になっていたのだった。浮いた草の間から、土手の上に逃げ出すトノサマガエルや、真つ赤なアメリカザリガニの姿もあった。

「ほら、ほら、ほら。タクヤ、頼む」

小魚を網に数匹つかまえたマサアキが、その網をタクヤに差し出した。

「すごい、すごい。フナにウグイも入ってる」

タクヤは、嬉しそうに魚を受け取ると、一匹ずつタライの中に押し込んだ。

「やっぱり、網の威力はすごいだろ」

「うん」

「タクヤも、やりたいか？」

「うん。僕はいい」

タクヤははつきりとそういつた。タクヤはタクヤで大満足だったのだ。マサアキや下級生たちの魚を受け取ってはタライに放り込む仕事だ、思いのほか楽しいのだ。なにしろ、みんなの獲物が全部自分のところに集まってくるわけで、なんだが自分が一番偉いのだと思えるほどだった。

「タクヤ。ほらヤツメウナギだ」

藻の間をうねうねと泳いでいるヤツメウナギを捕まえて、ケンジがいつた。

「やったね。ケンちゃん」

「ウナギだったら良かったのにな。ヤツメじゃあな」

ケンジは、そういうながらタライの中に獲物を納めた。そして、タライを眺めながらぼそりとつぶやいた。

「でも、これ本当に、良くできてるな。自分で考えたのか？」

「うん」

⑧「すごいよ……」

しみじみとした顔で感心するケンジの顔を見て、タクヤはにっこりとほほ笑んだ。

(阿部夏丸「見えない敵」より)

問一、①——「意地悪なくらい」とあるが、作者が、晴れたことを「意地悪」といつている理由として最も適当であると思われる

ものを次より選び、番号で答えなさい。

- 1、ケンジが、晴れて暑くなることを嫌がっていたから。
- 2、ケンジが、川ざらいが中止になればいいと思っていたから。
- 3、ケンジが、タクヤを誘うことができなくなってしまうから。
- 4、ケンジが、タクヤの父親に見つかるかもしれないから。

問二、②——「ケンジもやはり、時間より早くバケツを持って家を出た」とあるが、ケンジが早く家を出た理由として最も適當なものを次より選び、番号で答えなさい。

- 1、タクヤを一人で行かせるのは気の毒だと思ったから。
- 2、タクヤの父親の鎌研ぎの名人芸を見たかったから。
- 3、川ざらいの前にタクヤの様子を確かめたかったから。
- 4、タクヤよりも早く川ざらいに行きたかったから。

問三、③——「誘う勇氣などなかった」とあるが、この時のケンジの心情として 最も適當なものを次より選び、番号で答えなさい。

- 1、仲間はずれのタクヤと一緒に川ざらいに行くことで、アキラやマサアキから責められるのがいやだった。
- 2、タクヤの両親に、川ざらいに子どもたちが集まるといふ事情をわかりやすく説明する自信がなかった。
- 3、タクヤを連れて行くのが使命だと感じていたが、それ以上に、アキラやマサアキの機嫌^{きげん}を損ねるのがいやだった。
- 4、タクヤに同情しているが、自分にはどうしてやることもできず、どのように接してよいのかわからなかった。

問四、④——「黙ったまま首を横に振った」とあるが、ケンジが黙ったままだった理由として最も適當なものを次より選び、番号で答えなさい。

- 1、タクヤが来ないことをアキラが予想していると思ったから。
- 2、タクヤを連れて来られなかったことを、アキラに責められると思ったから。
- 3、タクヤの様子を見に行ったことをアキラに知られたくなかったから。
- 4、アキラがタクヤに興味を持つことが不快だったから。

問五、⑤——四ヶ所の「……」にこめられたアキラの心情の説明として最も適當なものを次より選び、番号で答えなさい。

- 1、タクヤのことを忘れようと努力しているが、それを周囲が許さないために、いらいらしている。
- 2、タクヤがなぜ姿を見せないのかと考えているが、だんだん、信賴^{うぶ}を裏切られたような気持ちになっている。
- 3、タクヤのことについて、アキラと相談したいのに、周囲にたくさんの子供たちがいるために、それができずに困っている。
- 4、タクヤが来る前に、大人たちによる川ざらいが始まってしまふのではないかと心配している。

問六、⑥——「卑怯だ、ケンジは」とあるが、アキラがケンジを卑怯だと思った理由として最も適當なものを次より選び、番号で答えなさい。

- 1、マサアキに同意するのが当然なのに、それを言葉にすることから逃げているから。
- 2、マサアキに対する怒りを、何も言わないアキラにぶつけようとしているから。
- 3、タクヤのことについて、面倒くさいと思って、考えることをやめてしまったから。
- 4、タクヤに同情しているのに、いさかいを避^さけるために、マサアキに反論しないから。

問七、⑦——「満身の笑み」にこめられているタクヤの思いとして最も適当なものを次より選び、番号で答えなさい。

- 1、一人で持ったための道具を自分が苦勞して作ったことを、アキラたちが評価してくれているのを感じてうれしく思っている。
- 2、アキラたちが、言われたとおりにタライに細工してきた自分に対して尊敬の気持ちを持っていることに、照れくささを感じている。

- 3、約束の時間に大きく遅れてきたことを気にしていたが、アキラたちにそのことを責められなかったので安心している。
- 4、自分が作ってきた道具について、年下のアキラたちにいろいろと説明をするのが楽しくて仕方ない。

問八、⑧——「すごいよ……」にこめられているケンジの気持ちとして適当でないものを次より一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、タクヤに制裁を与えることを考えていた自分を責めている。
- 2、自分が何も協力できなかったことを恥ずかしく思っている。
- 3、タクヤが来ないのではないかと疑ったことを恥ずかしく思っている。
- 4、タクヤがすべてを一人で解決したことに驚き、感心している。

五、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

人間の知識というものはどのようにして成り立つのか、それはどれだけ確かなのか、科学をはじめとする人間の知識に限界はないのかというような、知識のあり方^①ないしは人間の認識能力をめぐる幾つかの問題を取り上げ、知識という観点からの人間理解を試みたいと思います。

私たちの日常的知識（常識）の大部分は、いろいろな機会にだれかに教わったり書物やほかの情報源から得られたものから成り立っています。ところで現代は、「情報化社会」とも言われるように、さまざまな情報がいろいろなメディアやルートを通じて飛び交っていますが、なかには根拠の不確かなものや一方的な宣伝のためのものもありますし、極端な場合にはウソの情報を流してまで自分の利益を図る人もいます。他方、科学技術的知識は、ますます高度化・専門化が進み、普通の人にとっては（科学者でさえ、ちよつと専門分野が異なる人にとっては）その内容だけでなく意義も理解困難なものが多くなっています。

このように、理解したり確認するために多くの労力を要する多様で膨大な情報や知識に取り囲まれて、多くの人は自分でその真偽や意義を確かめる手段も気力も持てないまま、ただ振り回され圧倒されて、無条件に信じるか、それとも頭から無視しないし拒否するかという態度に陥りがちです。（ア）科学については、絶対的・最終的な真理（無条件に暗記すべきもの）であるかのように受け取る（いわば信仰する）人がいる一方で、技術や産業と結びついて間接的に恩恵を与えてくれることだけが大切で、その理論自体は、一般人の日常の思考や行動には直接関係がなく、特に理解しようとする必要もないもの、というようなとらえ方をする人も少なくないようです。（イ）宗教や商業などの宣伝については、頭から無視する人もいる一方で、「ご利益がある」とか「絶対に得する」、「絶対に効果がある」などと称する宣伝をうのみにして、その宣伝の当否や宣伝する人の意図を自ら考えようとせず、かえって重大な被害にあう人も跡を絶ちません。

（ウ）、与えられる情報や知識をすべてうのみにしたり逆にすべて無視するのでは、複雑で変化の激しい現代社会に適應するのが困難だけでなく、自ら真偽を判断し正しいと信じるものに従って行動する主体的な生き方もできません。（エ）、こ

うしたさまざまな種類、さまざまなレベルの情報や知識や信念に対して、特に自分の知識や信念、あるいは受け取った情報に対して、大まかにでも③自らその根拠や信頼性や意義を考え、それに応じて行動しようとする態度を身につけることが大切です。そのためにも、情報や知識というものの根拠、確かさ、射程、限界といった問題をあらかじめ一般的に考えておくことが必要でしょう。

私たちは日ごろたくさんを知っていると思っていますが、それらは本当に確かなことでしょうか。単なる思いこみであったり根拠のないうわさや誤った情報に振り回されている、ということはないでしょうか。そうした心配を避け自ら真であると確信できる知識に基づいて自信を持って行動できるためにも、人間の知識はどんな根拠に基づいているのかを考えておく必要があります。そこで最初に、だれでも知っていそうなことや、ここに示した状況の下では自信を持って断言しそうな事柄を幾つか例示して、それらの主張はなぜ正しいとされるのかを考えてみることにします。

- (1) 関ヶ原の戦いは西暦一六〇〇年に行われた
- (2) ブラジルの面積は日本の面積の二〇倍以上ある
- (3) 水は水素と酸素に分解できる
- (4) サッカーのワールドカップが今年日本と韓国で開催される
- (5) シドニー・オリンピックの女子マラソンで高橋尚子選手が金メダルを取った
- (6) A君は今日、カゼで欠席だ(友人から聞いたものとして)
- (7) 昨晩は、気温が0度以下になった(凍結した路面を見ているものとして)
- (8) このチョークから手を離せば落下する(空中で支えているものとして)

どれも簡単なことばかりですが、あなたがこれらのことを知っている、あるいは主張するとして、それはあなたが自分で直接確認したことでしょうか。そうでないとしたら、そのように考え、あるいは信じる根拠は何でしょうか。

まず、(1)のケースについて考えてみると、おそらく「教科書」とか「参考書」に書いてあったという答えになるでしょう。ではそれを書いた人は直接それを確認したのかと考えると、執筆者も現代人である限りそれも違うはずです。ひよっとすると執筆者は、その時代を研究している専門家の書いた書物を参考にしたのかもしれませんが。そしてその研究者は、その時代に書かれた文献などの史料を利用していることでしょう。しかし今日残っている史料には、名前が知られているかどうかは別として、記録した人はいません。そしてその記録者は、当事者や目撃者から話を聞いたのかもしれませんが。事実がどうであれ、四〇〇年前の出来事の情報私たちに伝わるためにはこれに類する(おそらくはずっと複雑な)プロセスがあるはずです。そこで、以上の知識の伝達過程を図式化してみると、次のようになります。

(1) ↑教科書 ↑執筆者 ↑研究者 ↑史料 ↑記録者 ↑当事者・目撃者

次に、(2)のケースについても同様に考えてみると、例えば次のようにさかのぼることができるでしょう。つまり、もし最初に確かめたのが事典(参考書)だったとすると、その執筆者から統計資料集へ、そして実際に測量した人へのようにさかのぼることができるはずです。もちろん、ブラジルと日本ではおそらく測量した人が異なるしいずれの場合も多数の人が関わっているはずですが、ここでは簡単に「測量者」としてまとめておきます。これを図式化してみると、次のようになります。

(2) ↑事典(参考書) ↑執筆者 ↑統計資料集 ↑測量者

(3)以下の事例については自分で考えてほしいと思いますが、いまの考察からもわかるように、私たちが持っているたいの知識や情報は、実はこのように、推理や伝達などたくさん人の媒介過程(途中のプロセス)を経た間接的(二次的)なものにすぎません。だからいけないとか間違いだというわけではありませんけれども、途中のプロセスが多くなるほど、思考の誤り、伝達の誤りやゆがみなどが起きる可能性も増えるはずです。ですから、教科書とかニュースの報道などでは実際に公表されるまでに何段階もの厳しいチェックがなされるわけですが、それでも急ぐあまり不正確な報道をして後で訂正する場合も出てきます。まして日常的知識やうわさ話などでは、情報源や伝達過程について十分な吟味もしないまま、また憶測も加わったまま、誤った情

報をいつまでも信じ込んでいるという場合さえ珍しくありません。そうした誤りやゆがみの原因を探り正しい思考や伝達を保証するために、いろいろな学問で大切な研究がなされていますが、ここでは途中のプロセスのことは抜きにして、知識の一番もことになるものことだけを考えたいと思います。知識の出発点あるいは直接的（一次的）知識と言えるのはいったいどんなものなのでしょうか。

いきなり一般的に考えることは難しいので、先ほどの例で考えてみます。(1)や(2)の例で最後に来ている（時間的には最初の、出発点となる）のは何かということです。すると、(1)では実際に出来事を体験または目撃した人、(2)では現地で測量した人のように、どちらのケースでも報告あるいは記述している事柄を直接自分で経験した人の認識、判断がもとになっていることがわかります。

もちろん、必ずしも他人の、あるいは昔の人の経験に頼る必要はありません。水が水素と酸素に分解できることは、おそらく初めは教科書などで学ぶことでしょうが、自分で実験して直接確かめることもできます。また、人類が生まれる以前、あるいはその後でも文字が使用される以前の出来事などは、当事者・目撃者による報告を当てにすることができませんが、残された化石や遺跡や地層、あるいは物質の運動や変化の痕跡などからある程度推定することができます。これらの場合には、現在残っている観察可能な資料を手がかりにして過去を知ろうとする（歴史的資料の場合も結局は同じことです）わけですが、やはりだれか（多くの場合研究者）がこれらの重要な証拠を直接確認していなければその報告は信用されたいはずで

結局このように考えていくと、どの場合でも、だれかが直接見たたり聞いたたりして確かめたこと、つまり感覚的に経験したことに行く着くことが分かります。書物やマスコミを通じて得られる知識も、もとをたせばだれかが直接経験して確かめたことを根拠としているはずでし、そうでなければ簡単に信用するわけにはいきません。自然のあり方や仕組みを探ろうとする科学で観察や実験が重視され、観察や実験による裏づけのない主張とか観察や実験によってテストできないような主張は、どんなにもっともらしくても直ちに科学的な主張とは認められないのもこのためです。

では、だれかが自分で確かに経験したことを報告すれば、それはそのまま「事実」とか「真理」として受け入れてもらえるのでしょうか。例えばあなたが見たこともない鳥を発見し新種の鳥だとして報告した場合、それは直ちに重要な科学的発見として認められるでしょうか。おそらくそうはならないはずで、それは専門家にはすでに知られていた鳥かもしれないし、ひよっとするとあなたの勘違いかもしれないです。ですから、どんな興味深い報告であっても、科学者はひとりだけの、あるいは一回限りの観察の報告をうのみにせず、同じような状況や条件で繰り返し観察や実験を試みるはずで、科学で重視されるのは、このように観察や実験が「公共性」、「^④反復性」を持つことであり、こうした条件を満たしているからこそ、科学的知識は（オ）なものとして信頼されるのだと言えます。

^⑤知識の根拠、あるいは出発点は何か、と考えてきて、それは結局だれかが直接経験したこと、科学で言えば観察や実験だということ、しかも特定の人だけが、また一回限りしかできないような経験ではなく、一定の手順にさえ従えばだれでも何回でも繰り返し確かめることができるような経験が大切だということがわかりました。このことは、科学に限らず、私たちの日常生活で出会うさまざまな主張、例えばうわさ話やコマーシャルや宗教的な宣伝などを聞いて、それを信じたり疑ったり、あるいは当面賛否を保留する、などの態度を決める際にも大いに参考になるはずです。

（内田詔夫「人間理解の基礎」より）

問一、空欄（ア）から（エ）に入れるのに適当なことを次よりそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- 1、ですから
- 2、また
- 3、しかし
- 4、例えば

問二、①——「ないしは」と同じ意味の四字の言葉を、本文中から抜き出さない。

問三、②——「真偽」と同じ作り方の熟語を次より選び、番号で答えなさい。

- 1、興味 2、功罪 3、孝行 4、道理

問四、③——「自らその根拠や信頼性や意義を考え、それに応じて行動しようとする態度」とあるが、それによって、人間はどのような生きていくことができるかと筆者は考えているか。次のように説明した場合に、空欄（1）（2）に入れるのに適当な本文中の語句を、それぞれ指定の字数で抜き出しなさい。

真実であると自分が信ずることのできる知識や情報をもとにして、自信を持って行動し、（1 七字）しながら（2 七字）をすることができる。

問五、④——「反復性」を説明している三十五字以内の部分の本文中から探し、最初と最後の五字を抜き出しなさい。

問六、⑤——「知識の根拠、あるいは出発点は何か」と同じ内容を表す二十字の部分の本文中から抜き出しなさい。

問七、空欄（オ）に入れるのに適当な言葉を次より選び、番号で答えなさい。

- 1、客観的 2、構造的 3、積極的 4、機能的

問八、(3)～(8)の例について、図式化したものとして適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

